

「大黒屋光太夫とラクスマン」について

18世紀末に、幕府は御救（おすくい）交易（こうえき）と千島・樺太の調査（とうさつ）に握（あ）ることになりました。また、幕府は、ロシアの南下に伴い、松前藩（まつまへはん）の一藩（いっぽん）のみでは、ロシアに到底（とうてう）太刀打ち（たいとうぢ）できず、北方警備（ほくほうけいび）の必要性（ひつようせい）を痛感（つうかん）していました。そして、ロシアは、物資（ぶっし）の補給（ほきゅう）と毛皮販売市場（もうひはんばいちじょう）の開拓（かいたく）のため、強く日本との交易（こうぎょう）を望んでいました。

ロシアの動き

17世紀中頃（じゆうご）に、ロシアはシベリアを東へと進み、領土（りょうど）を広げて行き、オホーツク海（おほてつかい）沿岸（えんがん）に達しました。また、アムール川（黒竜江）沿岸（えんがん）では、清国（せうこく）との武力衝突（ぶりきせうとく）があり、ロシアが南下（なんしやう）できないまま、ネルチンスク条約（じゅうやく）（1689年）で両国の国境（こくぎやう）が定まりました。17世紀末になると、ロシアはさらに東進（とうしん）し、カムチャツカ半島（かむちやくかはんとう）東岸（とうがん）に拠点（きょてん）を設け、

シャバーリンの来航

年（1772）には、前年にラツコ島（ウルップ島）に来た異国人（わがちほうじん）に、我地方（わがちほう）のアイヌ（わがちほう）が殺されてしまつたので、我地方のアイヌが異国人（わがちほうじん）に不意討ち（ふいとうち）をして、異国人（わがちほうじん）を20人殺害（さつめ）すると、残りの70人余りは海を越え退散（たいさん）したといつことが、「この地のアイヌから伝わつた」と、松前藩（まつまへはん）へ報告（ほうはい）がありました。

シェリコフの案

その一端（いだん）として、安永（あんえい）元年（1772）には、前年にラツコ島（ウルップ島）に来た異国人（わがちほうじん）に、我地方（わがちほう）のアイヌ（わがちほう）が殺されてしまつたので、我地方のアイヌが異国人（わがちほうじん）に不意討ち（ふいとうち）をして、異国人（わがちほうじん）を20人殺害（さつめ）すると、残りの70人余りは海を越え退散（たいさん）したといつことが、「この地のアイヌから伝わつた」と、松前藩（まつまへはん）へ報告（ほうはい）がありました。

ラツコ島襲撃事件

千島列島（せんとうれっとう）沿いにラツコの猟場（りょうじょう）が移動（いどう）し、日本列島（にほんれっとう）に近づいてきました。そして、地元（じげん）アイヌとの衝突（せうとく）もありました。

以後（いご）決して渡来（わたら）せぬ（よつうに）と伝え（はな）べ、ツキノエ（つぎのえ）には、異国人（わがちほうじん）を連れてきたことに對（むか）し厳しく叱（しか）りました。

また、ロシア商人（じゆうじん）らも、ツキノエに對（むか）し、心底（こころ）が判（わから）らず油断（ゆだん）ならざる物（もの）と見ていたよう（よ）うで、結局（けっきょく）ロシア商人（じゆうじん）シヤバーリン（しやばーりん）らは、日本人（にほんじん）との交易（こうぎょう）について、何も成（な）りが無（な）く帰つてゆきました。

大黒屋光太夫

天明（てんめい）2年（1782）12月（いよいよ）に伊勢（いせ）白子（しろこ）の神昌丸（じんじょうまる）は、船頭（ぱんとう）の大黒屋（だいこくや）光太夫（こうたゆう）ら16名（じゅうろくめい）が乗（の）り込み、紀州（きしゅう）藩（はん）の廻米（まわまい）を積（の）み江戸（えど）へ向（むか）へ途中（じゆうとう）、駿河（すが）沖（おき）で暴風（あお）り、8カ月（かげつ）間（まん）漂流（とうりゅう）して、翌年（あとねん）の7月（しちがつ）にアリューシャン列島（アリューシャン）のアムチトカ島（アムチトカとう）に漂着（とうちやく）しました。

ラクスマン根室來航

寛政（かんせい）4年（1792）9月（いよいよ）に、ロシア人（ろうしあじん）約40名（よそじゅうめい）ともに漂流民（とうりゅうみん）3名（さんめい）を乗せた工（こう）カテリーナ号（カタリーナごう）は根室（ねむろ）に投錨（とうひょう）しました。漂流（とうりゅう）から10年経（の）て3名（さんめい）が蝦夷（えぞ）地（じ）に着（き）ましたが、小市（こいち）は根室（ねむろ）で待機（たいき）中に死亡（めいじゆう）してしまいました。

めで、安永7年（1778）にナタリア号（なたりあごう）に乗（の）りノツカマップ及びアッケシを訪（たず）ねました。これは、「くなしり」のツキノエ（ツキのえ）が案内（あんない）したもので、一度（いちど）目の安永8年（1779）に訪（たず）ねた時に、松前藩（まつまへはん）の官吏（かんり）（役人）（やくじん）は、

ロシア商人（じゆうじん）に対（むか）し、「異國（いこく）との交易（こうぎょう）の場所（ばしょ）は、長崎（ながさき）港（こう）のみと幕府（まくふ）が定（さだ）めているので他の（ほかの）地（じ）では許（ゆ）されない。以後（いご）決して渡（わた）らせぬ（よつうに）と伝え（はな）べ、ツキノエ（つぎのえ）には、異国人（わがちほうじん）を連（つれ）れてきたことに對（むか）し厳（いつ）しく叱（しか）りました。

そこで、シェリコフ（しりこふ）は、極東（きつとう）のロシア領（りょう）に漂着（とうちやく）した日本人（にほんじん）を、本国（ほんこく）に送（おくり）返（もど）し、日本（にほん）に良（よ）い印象（いんじょう）を与（あた）えることによつて、日本（にほん）との通商（つうしょう）の特權（とくしゅん）を得（と）ようと考（かんが）え、この案（あん）がロシア政府（じゆうふ）に採用（さいゆう）されることになりました。

日本人（にほんじん）を、本国（ほんこく）に送（おくり）返（もど）し、日本（にほん）に良（よ）い印象（いんじょう）を与（あた）えることによつて、日本（にほん）との通商（つうしょう）の特權（とくしゅん）を得（と）ようと考（かんが）え、この案（あん）がロシア政府（じゆうふ）に採用（さいゆう）されることになりました。

シェリコフ（しりこふ）は、日本（にほん）に良（よ）い印象（いんじょう）を与（あた）えることによつて、日本（にほん）との通商（つうしょう）の特權（とくしゅん）を得（と）ようと考（かんが）え、この案（あん）がロシア政府（じゆうふ）に採用（さいゆう）されることになりました。

光太夫（こうたゆう）らは、この島（とう）やカムチャツカでロシア人の保護（ほご）のものとに数年（いくねん）を過（の）ごし、その後（のう）毛皮（もうひ）業界（ぎょうごう）を統一（とういつ）したの間（まん）生き残（の）った者は5名（ごめい）でした。その時（とき）、調査（ちょうさ）に來（くわ）った博物学者（はくぶつがくしゃ）キリール・ラクスマン（アダム・ラクスマン）の父（ちち）が光太夫（こうたゆう）らの世話を（せわを）し、帰（か）回国（かわい）を切（せつ）に希望（ほひ）した光太夫（こうたゆう）・小市（こいち）・磯吉（いそよし）の3名（さんめい）に對（むか）し、その嘆願（たんがん）のためにロシアの都（みやこ）ペテルブルグ（ペテルブルク）まで連（つれ）れて行（い）きました。女帝（めいてい）エリザベス（エリザベス）二世（にせい）に謁見（えつけん）するところが叶（かな）い、女帝（めいてい）は光太夫（こうたゆう）ら3名（さんめい）を日本（にほん）に送（おくり）還（もど）すことを命（めい）じました。その使（し）節（せつ）には、アダム・ラクスマン（アダム・ラクスマン）が選（えら）ばれました。